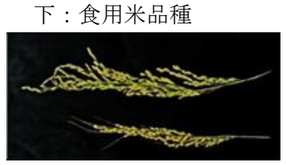
参考資料：これまでの飼料用米にかかわる取り組み（平成 19 年度以降）

<table>
<tr><td>概要</td><td colspan="2">飼料用米の知見を集積</td><td colspan="3">生産・利用モデルの検討</td><td colspan="3">生産・利用モデルの策定、実証、改良</td><td rowspan="2">参考</td></tr>
<tr><td>項目　　年度</td><td>平成19年度</td><td>平成20年度</td><td>平成21年度</td><td>平成22年度</td><td>平成23年度</td><td>平成24年度</td><td>平成25年度</td><td>平成26年度</td></tr>
<tr><td>栽培調査</td><td>40ａ　宮城</td><td>36ha　青森、宮城、茨城、千葉、宮崎</td><td>186ha　青森、宮城、茨城、千葉、福岡、宮崎、鹿児島</td><td>65ha　青森、宮城、茨城、千葉、福岡、宮崎、鹿児島</td><td>15ha　宮城、茨城、福岡、宮崎、鹿児島</td><td>143ha　宮城（モデル）、茨城、鳥取、福岡</td><td>122ha　宮城（モデル）、茨城、福岡</td><td>宮城（モデル）で120haを予定</td><td rowspan="11">○湛水直播栽培
代掻き後の圃場に直接播種
・播種機による播種①

・無人ヘリによる播種②

○自給飼料としての飼料用米利用の実証
・飼料用米自動添加装置③（枠内が添加装置）

・バルク車へ籾米を添加④（採卵鶏）

○多収穫品種の穂
上：多収穫品種
下：食用米品種
  </td></tr>
<tr><td>最高玄米収穫量</td><td></td><td>817*㎏/10ａ
（茨城・ホシアオバ）</td><td>800*㎏/10ａ
（茨城・モミロマン）</td><td>758*㎏/10ａ
（青森・みなゆたか）</td><td>757*㎏/10ａ
（宮城・夢あおば）</td><td>812*㎏/10ａ
（宮城・夢あおば）</td><td>732kg/10a
（福岡・ミズホチカラ）</td><td></td></tr>
<tr><td>平均収量/10ａ</td><td></td><td>549*㎏/10ａ</td><td>538*㎏/10ａ</td><td>563*㎏/10ａ</td><td>610*㎏/10ａ</td><td>501*㎏/10ａ（水不足）</td><td>537kg/10a</td><td></td></tr>
<tr><td>生産費/10ａ
（借地料、乾燥調製経費を含む）</td><td></td><td>92,062円/10ａ</td><td>96,100円/10ａ</td><td>79,396円/10ａ</td><td>73,553円/10ａ</td><td>72,969円/10ａ</td><td>71,206円/10a</td><td></td></tr>
<tr><td>直播・移植
（疎植）</td><td>調査 →</td><td></td><td colspan="2">条件が整えば、疎植で通常栽培と同等の収穫量であることを確認
・22年産青森県の例
疎植区　701kg/10a　普通植区716kg/10a</td><td>直播のコスト低減効果を実証①</td><td colspan="2">無人ヘリコプターでの播種による労働力の削減を確認②</td><td rowspan="3">生産・利用モデルのコスト削減方策として活用

（今後も継続して改良を加える）</td></tr>
<tr><td>施肥</td><td>調査 →</td><td></td><td colspan="3">リン酸（Ｐ）、カリ（Ｋ）が十分ある圃場（土壌診断による）で窒素（Ｎ）単肥を使用し、通常施肥の場合と同等の収穫量であることを確認
・22年産千葉県の例　N単肥区598kg/10a　NPK区600kg/10a</td><td colspan="2">→</td></tr>
<tr><td>防除薬剤</td><td>調査 →</td><td></td><td colspan="4">いもち病抵抗性品種（夢あおば、モミロマンなど）の栽培時に、いもち病防除を省略し、薬剤費の削減効果を確認（地域の了解を得て実施）</td><td>→</td></tr>
<tr><td>乾燥方法の検証</td><td colspan="2">高温乾燥、生ダップ乾燥、立ち枯れ乾燥、フレコン乾燥などの技術を実証</td><td colspan="2">ＪＡあきた北央の不稼働ＣＥを飼料用米専用に改修することに技術支援</td><td>宮城ＪＡ加美よつばの飼料用米専用ＣＥ新設に対し技術支援</td><td rowspan="2">＊富山のバラ配送例
フレコン11,873円/ｔ
バラ配送8,424円/ｔ
差　　▲3,449円/ｔ</td><td rowspan="2"></td></tr>
<tr><td>保管</td><td colspan="2">飼料用バラタンクで保管を実証</td><td colspan="3"></td></tr>
<tr><td>カントリーエレベータ（ＣＥ）から飼料工場へバラ配送</td><td colspan="2">調査 →</td><td colspan="2">ＣＥからのバラ配送の実現可能性を検討</td><td colspan="2">23年度：富山、滋賀で低コスト化を実証
24年度：埼玉で実証、宮城ＪＡ加美よつばの専用ＣＥで実用化</td></tr>
<tr><td>家畜への給与</td><td colspan="7">畜種別に配合飼料に添加できる飼料用米（玄米）の上限を確認。
・鶏（ブロイラー含む）：全ステージで60％　　・乳牛（育成期含む）　：15％
・豚：ほ乳期後期で45％、子豚期、肥育期、種豚で60％　　・肉牛（育成期含む）　：60％</td></tr>
<tr><td>飼料米生産量
（トン）</td><td>全国</td><td>9,505</td><td>24,361</td><td>81,237</td><td>183,033</td><td>183,431</td><td>115,350</td><td></td></tr>
<tr><td>自給飼料としての飼料米利用の実証</td><td colspan="2">自給飼料としての飼料米利用例を調査
・飼料タンクへの米投入
・バルク車への米投入　　など</td><td>農場で米を飼料に自動添加する装置の実証（採卵鶏）③</td><td>左記の装置に玄米挽割機能を付加し追加実証（養豚）</td><td>バルク車への米添加施設設置への技術支援（採卵鶏）④</td><td colspan="3">籾米をソフトグレンサイレージの原料として使用するなど、自給飼料としての飼料用米利用方法を検討</td></tr>
<tr><td>多収穫品種の選定</td><td colspan="7">農研機構、大学、県などと連携し、栽培調査をしながら地域ごとに適応する品種の選定をすすめた。多収穫品種は登熟期が長いため、気象条件以外にも用水管理（食用米との調整）、二毛作など地域実態に合わせた品種選定が必要である。
１．青森：みなゆたか（耐冷性が強い品種）
２．宮城：夢あおば、ふくひびき
３．茨城：モミロマン、ホシアオバ
４．千葉：べこあおば（コシヒカリの用水管理に合った品種）
５．鳥取：ホシアオバ、北陸193号
６．福岡：ミズホチカラ（麦の【全農による生産者買い取りスキーム】
１．概要
（１）全農（本所）が、販売価格変動リスクを負って、生産者と買取契約を締結し、直接、生産者から飼料用米を買い取る。</td></tr>
</table>

		（２）この際、全農（本所）はＪＡ（経済連）と業務委託契約を締結し、全農代理人としてＪＡに買い取りにかかる生産者との窓口業務を委託する。 ２．メリット （１）生産者 飼料用米販売価格の変動リスクが遮断されるため生産者の持ち出しが発生しないこと、所得が早期に確定すること等 （２）Ｊ　Ａ 適正に事業運営するための業務委託費が確保されること等 【生産者買取スキームのイメージ】播種作業に間に合う時期に収穫できる品種） ７．宮崎：モミロマン	